

はるか彼方を思う

井坂康志

目次

もういちど子供になれたら

ベルリン・マン

渡良瀬——きみは夕日を見ていた
おやすみ

(ひとつ詩ができるということは)

月光に波打つ海

(無題)

大山

硫黄

(やがてわかれがやってきて)

黄金の酒蔵——死者たちを讀える歌

三之宮比々多神社

(いったいこの世界は)

室

足跡

君は雪の中へ（白き田野に立つ君は）

虹

川べり

てぶくろ

ブルース——ちいさな死を友として

システム

朝

はるか彼方を思う

もういちど子供になれたら

もういちど子供になれたら
みずいろ汽車に飛び乗って
あのまちにひらりと現れて
子供のきみを探しに行こう
野に咲くたんぽぽをひとつ
つんで窓辺のきみに渡そう

もういちど子供になれたら
大人のぼくに教えてあげる
風や雲、風や小石の教える
あのやさしく美しい物語を

ちいさいいきもののみ知る
雨の歌や野の草の悲しみを

もういちど子供になれたら
みずいろ汽車に飛び乗って
波打ち寄せる海辺に行こう
大人のきみをきくと探して
丸いガラスとしろい貝がら
うつむくきみのてのひらに

ベルリン・マン

細長い影がひとつ

真夜中の街

黒い杖で

しじまの石畳を突く

ベルリン・マン

失われた時代に生まれ

失われるために生まれ

未浄化の情緒と

観念の遊戯とを

日々の糧として

街を東西に分かつ

漆黒の川面のさざ波

教会堂の尖塔を見下ろす

その常ならざる長身

狂える指揮者のように

指先を幾何学的に回し

シルクハットに蝶ネクタイ

ぼんとひげをひねり

口もと薄く笑みを浮かべ

人影なきヘルリンの街

フリードリヒ・シュトラセから

ゆらゆらめぐり

グレンベルガーまで

ひとまたぎ

壁の向こうを悠々と
細い指先を天にさし
ハンガリー舞曲を口ずさむ

ベルリン・マン

あの古い夢と新しい夢

偽りの文明の

流す涙

漆黒の天を反転させ

手にしたカップの

一杯のカフェに溶かし込み

暗黒ののどに流し込む

渡良瀬——きみは夕日を見ていた

きみは夕日を見ていた

新三国橋の彼方

冷たいサバンナの地平に

溶けゆく真っ黒なチーズ

きみは夕日を見ていた

利根川と渡良瀬川の

ひとつになる無音の場所で

枯れた冬草いっぱい

濃い影ばかり

口を変にとがらせて

きみは夕日を見ていた

筑波の峯は

うすくあかく田野の果てに

あの上州の山並み

日光の連山

きみは夕日を見ていた

制服の襟を立てて

頬を切る風のなか

自転車にもたれて

きみは夕日を見ていた

地の果ての

真っ黒な夕日が

潤む瞳の真ん中の

新三國橋の彼方に

ゆっくりと溶けていく

おやすみ

凍る星々の冴え冴えと

黒い大地を広く照らし

この伸びる影に

指先を結び合わせて

あの湿原のくすの巨木の下で

そうであったかもしれない日々の

そうであったかもしれない物語を

いつまでも語り続けよう

生温かい風の吹きすさび

僕らが遠い雲だった時代を

月だった頃の思い出を

山奥の鉱物だった日々の

呪文を今唱えよう

永遠にいたる秘密の呪文を

おやすみ

(ひとつ詩ができるということは)

ひとつ詩ができるということは

ぶかっこうでもぶさまでも

野原のはずれに小屋を建てたのと同じこと

蔦や茅や枯れ枝で組まれた小屋も

ことりの雨宿りくらいにならなるだろう

月光に波打つ海

月光に波打つ海

水平線には小舟

松林をわたる風

月光に波打つ海

(無題)

土曜の昼下がりに

小学校から帰る

春の日の

白く霞がたなびいて

重い竹藪

錆びたはりがね

つくしの匂い

自分が世界で

世界が自分

魂がそう語りかけた
あの瞬間

大山

緑波うつ丘を透いて

黒土をやわらかに潤し

葉脈したたる水路のはて

やがて相模の大洋と合一する

江の島

海老名

湘南平

果ては大磯より

かの山をのぞめば

かつて海が月と一つだった頃

あるいは地水火風の
龍たちが地を形成したあの頃と
今も変わらぬその姿
誠に神霊のつくりたまひし
勲の歌

かの富士より遠く神人となり
太古モーセをつつむ

万軍の秘蹟

神の宿りし霊峰に

一滴の墨汁の流れ

綾なす雲間のスクリーンに映じ
今宿命の転変と憂苦を知る

あんまりのどやかに
こともなげに

なまあたたかい
春の風に土煙
薄紅にひたされる

硫黄

癒されてしまったら

何も書けなくなる

だから

打ちつけよ

あの重たいハンマーと鉄床との間で

マッチを擦れ

だから

堅い野生の火花のように

脳漿を散らし

躊躇なく

逡巡もなく

断固たる偏見とともに

マッチを擦れ

冷えた自我を灼熱せよ

(やがてわかれがやってきて)

やがてわかれがやってきて

会えない時が音もなく

夜の潮にゆっくりと

そしらぬ顔であの月が

失われた遠い記憶を

今日も語ってくれるだろう

やがてわかれがやってきて

会えない時が音もなく

茜雲の薄くもつれるように

黄金の酒蔵——死者たちを讃える歌

軒下すれすれに走るせせらぎ

いくつもの起伏とカーブを抜けて

銀のますのように

まだらなす黄金のたまりを安らいで

あの酒蔵に筋をひいて流れ落ちる

数えきれない世代の間

名づけられることなき琥珀の酵母

言葉と精神のウィスキーを醸し上げる

鉛色の小瓶につがれ

ディオニソスの饗宴の
テーブルに載るのを待つ

時代は酒蔵

人は酒

食道をせせらぎが流れ
臓腑に落ちていき

虹のような永遠を見せ
死者たちが語り始める

新しきものはない
そのひとしずくが永遠と相通し
太古の幻影を見せ

死者たちとともに

輪舞する

蔵人よ

君の体と心と霊をめぐる
酵母のどこからきたかを
君は知らない

蔵人よ

君の蔵で醸せ

夕景の黄金の奔流

この酒蔵を

命を懸けて守れ

三之宮比々多神社

木製の鳥居をくぐり

やはらかな風に手を浸せば

大山の冷気の

小川のとまりに似た

清冽な一隅にいたる

鋭利な一本杉の先端は

落雷に焼かれ

なだらかな丘から

相模の大海までも

みはるかすようだ

華美なものはなく
引き立たせるものもなく
誇ることなく
ただ数千年ここに
いつづける神々

あなたの表情は
街角の豆腐屋の主人の
恥ずかしそうな笑顔を
私に思い起こさせる

まだらの午後の陽さしが
けやきの葉陰から
薄く漏れている

(いったいこの世界は)

いったいこの世界は

無数の小さな英雄を

どれほど破滅させてきたろう

いったいこの世界は

名もなき高貴な魂を

どれほど損なってきたろう

真夜中夢に起こされて

天井のしみと

わが魂が

しずかに語りかけてくる

室

思い出だけを私はたずさえて
室にはいりたい

枝を透く風のざわめき

山の歌を聴きながら

ゆっくりと思い出そう

山里のからすの声

雪国の静かな夜

私が生まれた日のことを

不条理のために世を去った

幾千もの魂を

室のなかで

眠るように

あたたかな黒い土に

ゆっくりしみこんでいく

水のように

夢見ている

夢を見ている

室はやがて閉じられ

鹿たちのふみしめる

腐葉土となる

ふたたび開くことはない

きっと私がいなくなっても

からは鳴くのだろう

雪は舞うのだろう

永遠にもう
悲しむことはない

足跡

まだらの影なす冷えた野

小枝、足跡

凍ったタオルケット

切れ切れの記憶

井戸に差す残照

君は雪の中へ（白き田野に立つ君は）

白き田野に立つ君は

さらめの風にあおられて

椿葉にぶく揺れるたび

吐く息さえも錆びついて

木の電柱や凍るミラー

硬い雲に覆われて

君の肩と前髪に

熱い涙に化石する

白き田野に立つ君は

ちように冬枯れのこんな日に

重くざわめく真昼どき

赤光のひたすら降り注ぐ

虹

日がな一日横になり

森に響くこだまに耳を傾ける

驟雨の合間

雲がぐらぐらと駆け

森に消えていく

太陽がさしはじめる

身を起こすと

いつの間にか虹がかかっている

川べり

五分だけ、いや十秒でいい

あなたと川べりを歩きながら

かえるの声に耳を傾けてみたい

生ぬるい川底をざりがには這い

水生の虫が土煙を斜めに切る

世の何もかもを思い煩うことなく

ひたすらにせせらぎと

波うつ黄金の波で

からっぽの心を
からっぽのままに

てぶくろ

てぶくろの片方を探しに行こう

明け方の凍った路面に

始発電車を遠く聞く

あのとぶくろの片方を

雑踏に踏みつけられ

昨夜の氷雨に漬けられて

一瞥もされることがない

あのとぶくろの片方を

守られていたあのととき

天使たちと暮らしていた頃を

記憶するやさしいいきもの

てぶくろの片方を探しに行こう

ブルース——ちいさな死を友として

新宿の空

このギターをつまびこう

始発まではまだ間があるだろう

酔客の姿も絶えて

前髪の間を

真昼のような月が昇るだろう

風に切れ切れのアルペジオ

よれた煙草に火をともし

革ジャンパーの酔えた匂い

今夜最後のブルースを

ちいさな死を友として

システム

生死は井戸を通して循環し
家門も金も権力も

一つのシステムを増幅する

生者は死者の声を聞き

内なる荒廃の代わりに

大輪の徒花を次世代に送る

世界は一つのシステムだ

死者たちのシステムだ

太古より築かれた

石垣のように

ちいさなものたちや

愛する女たちの

絶望の涙の上に

今もそそり立つ

あのシステムにくらべれば

私たちは殻のない卵

何世代、何十世代、何百世代

深い森のように

蒼い淵のように

たゆみなく塗り固められた

システム

石壁の頂に霞たなびいて

薄明の津波に流された
涙に似たおびただしい
驟雨がわが街を濡らす

このシステムにとって
一つの人生はこの濃霧の
一滴にも足りない

朝

朝は教えてくれる

眼が光を知るのではない

光が眼を知るのでと

朝は重ねて教えてくれる

生は島で

死は夜の海なのだ

生は海底から細長く延びた

死の突端に過ぎず

いつでも潮に

洗われうるのだと

はるか彼方を思う

いつのことなのかはわからない

ポーランド南部の中規模都市の外れ

プレスラウ地区に住んでいた

一三人兄弟の下から三番目で

正確に言えば兄弟のうち

五人は小さい頃に死んでしまった

女の子が五人、残りは全員男の子

貧乏という観念などない

ただ生活があるだけ

騒音が何を意味するのか知らない

現実のありようが

うまく掴みきれない頃

ただ母が半狂乱で泣き叫ぶ声の

今も耳に残る

幸せな幼年時代が何度も何度も

頭の空洞をこたまする

みな雪かきをしている

私は母のスcoopに手を添える

死の硬質な匂いがする

と思うと頭を撃ち抜かれ

死だと気づくまでに

時間はかからない

気づくと私の亡骸は下に見える

母がすがりつく

何気ない日常の会話

食事の風景ばかり

懐かしく思い出される

悲しみはない

生きているときは

生きているだけで十分だった

死んで自分が思うより

大きな存在とわかる

みんなが私のことを

考えていてくれたから

生きているときは

思いもしなかったこと

あの頃小さな室で

私を抱き留めてくれた人たちに
いつかまた会えるか

やさしいみんなといつかまた
テーブルにつける日はくるか

肉体を離れ

砂漠の嵐みたいに

霊気が地平を覆うのが見える

何もかも一つの力のなかに

吸い込まれていく虹に見える

母は今なお私の歯を大事にしている

優しい人だった

私は知っていた

全員を愛してくれただけれど

とくに私をこの上なく愛してくれた

この絶望の支配する世界

いつも心の中で私に話しかけて

心の中で私は答える

ユダヤ人墓地の

小さな墓碑に手を合わせ

気配に気づいて

涙を拭いて微笑む

母はいつも私にこう言う

「いつかもっといい時代に生まれて

また一緒にご飯を食べられるようになるといいね」

黒い蜜のような時間が流れ

ふと目をつむったら

知らない風景に囲まれていた

ほんの一瞬に思えたけれど

長い時間が経っている

もうポーランドの

乾いた青と緑の世界ではない

日だまりの国だった

不思議な粘液と濃厚な光が注ぐ土地

ぼってりとした甘い霧

気づくと私は新しい世界に生きていた

何度も生きている

そのたびにだいじなものを捨て

だいじな何かを拾う

私があの手をした女性に会うのは

二〇年近く後のこと

母だった人は言う

「一緒にご飯を食べようね」

人生の目的は人生そのものにあるとその人は言う

あるとき身を引きちぎられるように

泣いた母が目の前にいる

一瞬一瞬が幸福になるよう私は祈る

純真な悲しみが

ほんとうに雪のように

私の肩に降りる

粉雪のような情緒がやさしく舞って

いまこうして

芯から凍える吹雪のなかを
歩んでいる

どこかで

かつて出会った人たちが
やさしく歌い交わしている

それが私たちをたくさんの
音符の一つにしてくれる

今日はほんとうに嵐で
雷まで鳴っていた

はるか彼方を思う